2022年 6月 12日（日） 関東学院教会
花の日・こどもの日 主日礼拝 説教要約

説教 「こどもを祝福するイエス」 マタイによる福音書 19章13-15節　髙橋彰

◆子供を祝福する

19 13そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々
を叱った。 14しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。
天の国はこのような者たちのものである。」 15そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。

聖書 新共同訳（C）日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

イエスがおられたところに人びとがこどもたちを連れてきました。人びとはイエスを「ラビ（先生）」と呼び、神の御心を教えてくれる教師のように見ていたばかりでなく、「旧約時代の預言者たちの一人のようだ」（16：14）と噂し、霊の力によって人びとの思いに触れ、未来の出来事の意味を告げる力を備え、「主はこういわれる」と告げた預言者たちを思い起こさせたのでした。預言者マラキが告げたエリヤの再来（マラキ3:23）とまで言われました。

こどもたちをラビに祝福してもらうという習慣がユダヤ社会にあったようです。「断食の日（贖罪日）に、断食後に長老（律法学者）のところで祝福を受け、こどもたちがいつの日か律法の知識とよい業に到達できるように祈ってもらう」のです。また、イエスが宣教活動で「手を置いて」癒しを行っていたことも評判になっていたようです（9：18他）。そこで人びとはこどもたちに祈ってほしいとイエスの元に来たのです。

ところが、弟子たちはこの人びとを叱ったのでした。理由は記されていません。こどもたちが祭儀的な汚れがあると見なしたのか、こどもたちなど主イエスの時間と注意を割くべき存在としては取るに足らない妨げになると考えたのか、あるいは「手を置く」という評判が魔術的な効果を期待されるような期待への抵抗だったのか。

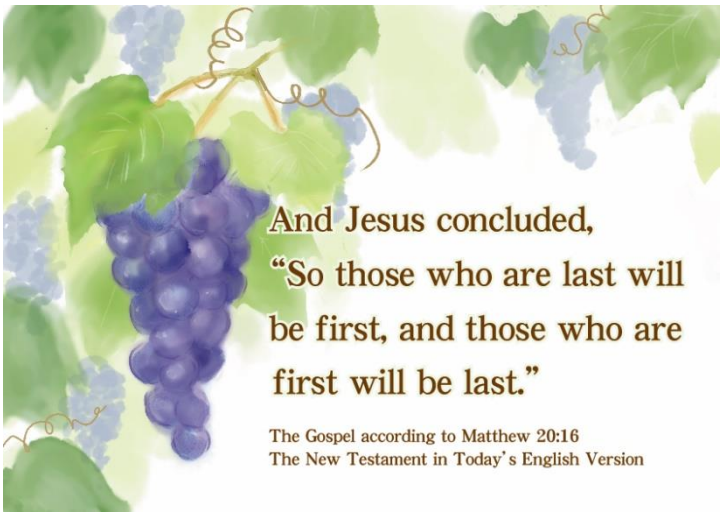
「しかし」、イエスは弟子たちのそのような態度と逆に、「こどもたちを来させなさい、わたしのところに来るのを妨げてはならない」と言われました。他の福音書では同様の場面でイエスが弟子たちに「憤った」とさえ書かれています。

イエスが「天の国はこのような者たちのものである」と言われたとあるために、このような者（こども）とは何をさすのか、天の国に入る条件は何か、と考えられがちです。しかしここで子供がどういう者かは書かれていません。イエスのもとに「連れてこられ」ねばならないということだけです。むしろこどもの性質よりも、主イエスがどのようなお方で神がどのような思いであるかが現わされています。こどもたちに神の国を、理由なく、無償で、惜しみなく与えられる方だということです。その神の恵みを、人が何かの条件を付けたりして「妨げてはならない」のです。イエスはこどもたちに手を置いて祝福を与えました。このようにイエスによって語られ示された惜しみない神の愛は、人びとが思っていた神の国への条件や順序をひっくり返すような驚きを与えたのでした。この後の「後の者が先になる」（19：30, 20：16）という言葉や「ぶどう園の労働者のたとえ」にもつながってゆきます。

18世紀半ばアメリカのメソジスト教会で、6月にこどもたち中心の集会を行ったのが「こどもの日」の始まりと言われます。こどもたちに宗教教育を行わせ、また花を持ち寄って会堂を飾って神を礼拝した後、病人を見舞い、社会施設を慰問して奉仕と感謝を表すことを学び奉仕する日として広まりました。しかしその根源には、神は「こども」に、「小さな者」に、惜しみなくみ国を与え祝福されている方であることをわたしたちは神の前で感謝し、恵みとして受け、喜びを表したいと思います。

「キリストの愛で」（We are many, we are one）

キリストの愛で生かされるとき　わたしたちひとつになれる
夜空一面輝く星や　連なるぶどうのように
幹から伸びるたくさんの枝　連なるぶどうのように

いろんな人と違いを超えて　認め合い共に生きよう
色とりどりに編まれた糸や　連なるぶどうのように
野原いっぱいに広がる花や　連なるぶどうのように

創造の歌を共に歌おう　あたらしい世界をつくろう
心一つに奏でるハーモニー　連なるぶどうのように
大空にかかる虹の七色　連なるぶどうのように